人文科学研究　No.16, pp.93-104　　March 2020

マーヴェルと回覧文化

― 手稿版「ホラティウス風頌歌」についての覚書[1]

松　崎　　毅

1.「ホラティウス風頌歌」と回覧文化 ― 序に代えて

「英語で書かれた最も優れた政治詩」（Carter 56）ともいわれるAndrew Marvellの“An Horatian Ode upon Cromwell's Return from Ireland”（以下Odeと略記）は、タイトルそのもの、また詩の本文が明示的に語るOliver Cromwellへの賞賛と、中盤に置かれたCharles Ⅰの処刑における高潔な態度の描写、あるいは結語に暗示されるクロムウェルへの皮肉ないし脅迫が語り手のアンビバレントな態度を印象付けるため、これまで夥しい数の解釈や議論を生じさせてきた（*Poems* 270-272）。この論争は、研究者たちがその推定執筆年の1650年におけるマーヴェルの政治的旗色をそれぞれに王政主義や共和主義に引き寄せようと試みるかぎり、おそらく終わらない。そしてある意味それは当然ともいえよう。文学史家たちがこの作品を「最も優れた政治詩」と称する主たる理由は、おそらく、この詩が随所で示しているいわば戦略的なアンビバレンスそのものにあるからである。

じっさい、この詩のなかでは、読み手の立場によってどのようにも解釈しうるancient rights、free states といった言葉、また修飾対象の不明な形容詞や副詞、名詞との格関係が不明な動詞等が度々現れて読者を悩ませる。文意のこのような流動性についてBlair Wordenは、「二極化した（polarized）世界のなかで、直接的かつ欺瞞的な両極的言語（bi-polar language）を創造していることがこの頌歌の奇跡なのだ」と述べる（100）。「二極化した世界」とは、具体的には、崩壊した王政の秩序と、それを捻じ伏せて成立しつつあるクロムウェルによる新たな秩序との選択を迫られた世界、と言い換えることができるが、Nigel Smithは、そのような世界にあって、言説の「二重性と妥協性」が必須であることを、たとえば、マーヴェルの同時代人で、変節を経て王党派と議会派のいずれの陣営でも政治パンフレットを書くことになったMarchamont NedhamやJohn Hallなどは十分に理解していたと述べ、マーヴェルの詩と彼らの言説の共通性を指摘する（82）。

Odeの解釈の困難さは、ひとつにはこのように、この作品が「二極化した世界」、つまり神の権威を背景にした君主制の論理と、マキャベリに代表されるようなリアリスティックな「力」（de facto power）の論理が交錯する政治思想の結節点に位置していた事実によると言える。ただ、そこにもうひとつ解釈の困難さの原因を付け加えるとすれば、それは、この作品が政治思想の結節点だけでなく、文学伝統そのもののある歴史的結節点に位置していたからだとも言える。すなわち、詩における手稿の回覧から出版へという流布形態の変化である。

J. W. Saundersの「出版の恥辱（stigma of print）」（Wilcher 255）という言葉が端的に示しているように、16世紀から17世紀前半において、詩を出版することは、名誉などではなく、詩作がもつ文化的（そして階級的）優越性を自ら否定する行為でありえた。詩人は自ら筆記した手稿、あるいはその複数の手書

き写本を、その文学上のパトロンや政治的影響力を持つ人物、詩人仲間、友人、家族等に配り、受け取った者たちはそれを写書し、あるいは写書させて保存した。読むだけの者もいたが、その写本はまた別の者の手に渡り、それがまた新たな写本を生み、そうして写本は詩人と直接・間接に親交のある人々、また親交はなくとも詩を愛好し収集する人々のあいだに徐々に広まり読まれていった。H. R. Woudhuysenは、詩におけるそのようなmanuscript cultureの実態を論じているが（153-173）、彼によれば、詩を受け取った者がそれを写書して残す手稿詩集成（manuscript verse miscellany）は、1620年代から1640年代にかけて数多く作られ（158）、たとえばJohn Donneの詩を含むこの時代の主要な集成だけで、少なくとも73以上のそれが存在したという（155）。一方、ダンの詩集の出版はその死後のことである。詩は、それを読むだけの教養と嗜好、そしてある程度の身分を持つ人々に対し基本的にプライベートなかたちで回覧されたのであり、出版物として大量生産し、「市場に売りに行く」（Wilcher 255）ような類のものではなかった。そしてこの価値観は、生前すでに詩集を出版していたBen Jonsonにおいてもおそらく同様であった。ジョンソンにとっても、「詩を書くことの愉悦の一部は、それがすぐさま手稿のかたちで回覧され、ほぼ時を置かずに収集家の注目の的になること、つまり人々がそれを写書させてほしいと懇願するのを想い描くことにあった」のである（Woudhuysen 153）。

このような価値観が詩人たちのあいだでいつまで共有されていたか、確かなところは判らない。ただ、表面的には、詩の流通の形態は1640年代にひとつの転機を迎えたといえる。内乱の進展とともに王党派と議会派の双方がいわゆるパンフレット戦争と呼ばれる言論闘争を繰り広げ、そのなかで、詩、特に哀歌は、出版され広範に流布されることにより、その闘争の武器となったのである（Loxley 193）。マーヴェルは1647年に大陸から帰国したが、この内乱末期の言論状況のなかで、Francis Villiers、Richard Lovelace、Henry Hastingsに捧げる詩を書くことで、王党派の言論闘争に少なくとも表面的には加担した。これらの詩はそれぞれ、紙一枚からなる四つ折版のパンフレット、ラヴレイスの詩集に付された推奨詩、そしてRichard Bromeが編んだヘイスティングズ追悼詩集のなかの一編として出版された。一方、20世紀前半の17世紀詩再評価の流れの中で、詩人としてのマーヴェルの評価を不動のものにした彼の抒情詩のほぼすべて、あるいは“Upon Appleton House”などのごく個人的な詩は、彼の死後３年を経た1681年に初めて*Miscellaneous Poems*として出版された。また、問題のクロムウェルに関する３編の詩は、Odeが手稿で回覧される一方、“The First Anniversary”は1655年に四つ折版パンフレットとして出版され、最後の追悼詩“Upon the Death of His Late Highness the Lord Protector”は、出版を意図して書かれたものの、ある政治状況の変化からEdmund Wallerの作品と差し替えられ、1659年のクロムウェル追悼詩集には収められなかった。加えて、この３編のいわゆるCromwell Poemsは、そのすべてが1681年の詩集に一度収められたが、直後に大半のコピーからこの３編のみが削除されたため、現在残る完全版は２冊のみで、そのひとつは英国図書館に所蔵されている。ちなみに、削除された３編を手書き写本で補い、かつ印刷部分にも若干の校訂を加えた特異な異本がボドリアン図書館に所蔵されているが、そのOdeの手書き写本部分は、詩形、句読法、大文字の使用法等の点で1681年に出版され直後に削除された印刷版とは明らかな別物で、これは、手稿で出回ったOdeの何らかの写本を所有していた人物、おそらくマーヴェルの甥のWilliam Popleの許にあったものと推定されている（*Poems xiv*）。

さて、このように見てくると、マーヴェルはその詩作品の流布ないし公表に当たり、ひとつのパターンに従っていたことがわかる。つまり、政治詩ないし政治的に利用しうる時事的な詩は出版物として公表する一方で、時代やその政治状況とは（少なくとも表面的に）関連の薄い詩、そして結果的に後世に高く評価されている詩は手稿で回覧したのである。ラヴレイスの推奨詩を書いたマーヴェルが、Odeの創作に着

手するまでの数年、王党派の文人サークルとかなり深い交流を持っていたことはほぼ確かである（Smith 64-74）。そして、その王党派マーヴェルが、手稿の回覧に対し、「王党派詩人」の祖であるジョンソンが示したような執着を共有していたことは十分に考えられる。ただ、ここで問題となるのは、上記のパターンの明らかな例外となるOdeの位置付けである。作品の完成度から見て、彼はジョンソンのように「人々がそれを写書させてほしいと懇願する」のを想い描いたのかもしれない。ただ、それが出版されなかった理由は、おそらくより現実的なものであった。たしかにそれは政治詩であったが、それを出版して大衆の目に晒すことは、自らの「変節」を意味もなく吹聴するに等しかった。一方、彼が詩人として身を立て、できるなら権力の中枢に潜り込みたいという野心を抱いていたのならば、彼は、ルネサンスから続く豊かな英詩の伝統を受け継ぐ王党派の詩人たちを唸らせ、同時に、新たに権力の座を手にしようとしているクロムウェルに対して影響力をもつ（たとえばThomas Fairfaxのような）穏健派の教養人にも好印象を与える必要があった。この作品はある程度の選択性をもって回覧される「必要」があったのである。

では、作品が回覧を意図して書かれたということは、その解釈とどう関わるだろうか。上記のような作品の流布の経緯を考慮に入れたからといって、その読みが大きく変わることはない。ただ、ひとつだけ気になるのは、すでに稿本が失われている1650年時点でのOdeと、英国図書館に残る*Miscellaneous Poems*のなかのOdeは、想定される読者が異なっていたという点である。後者の詩集の序文のなかで、マーヴェルの妻Mary Marvellは、そこに収められた詩が「愛する亡き夫の手になる正確な写しに拠り印刷された」と述べており、そこから推測されるのは、マーヴェルが、自身の死後の詩集出版を想定し、ちょうどラヴレイスが獄中で行っていたように、Odeも含めた未出版の作品に少なからず手を加えていただろうということである。1650年のマーヴェルは、この詩の手稿を手渡す人々の顔とその反応を思い浮かべながらそれを書いていた。一方、出版を想定して自身の過去の作品に手を入れていたマーヴェルは、おそらく、ありとあらゆる階層の人々が、この作品の美点を理解できるよう心を砕いたはずなのである。

本論はこのような観点から、1650年のOdeの痕跡をいくらかでも残していると思われるボドリアン図書館所蔵の手書き写本（MS Eng. Poet. d. 49、以下「写本版」と略記）[2]と、1681年の*Miscellaneous Poems*（115-118）におけるOde（以下「印刷版」と略記）[3]を比較し、この作品のより深い理解を試みるとともに、イギリスの詩がその回覧文化の伝統と出版文化の興隆の交わる所で、どのように変化したかを考察した覚書である。以下、章を改めて二つのOdeの比較分析結果を述べていく。

2．詩形と語彙

ホラティウス風頌歌（Horatian ode）は、マーヴェル自身ケンブリッジ時代にホラティウスの頌歌を模倣したラテン詩を書いてはいたものの、より直接的には、同時代の王党派の詩人・翻訳家で外交官でもあったSir Richard Fanshaweが1648年から始めていたホラティウスの頌歌の英訳を模倣してマーヴェルが採り入れた詩形だと推定されている。弱強４詩脚の対句と弱強３詩脚の対句から成る４行を１連とし、それを連ねた頌歌で、４詩脚と３詩脚の対句が交互に反復されることから、それは、二つの異なる声が交互に奏でる聖歌の交唱のような響きを持つとされる（*Poems* 270）。興味深いのは、写本版がこの後半の３詩脚の対句を平均で７字程度字下げすることで前半４詩脚の対句との響き合いを強調しているのに対し、印刷版は字下げを２字程度しか行っておらず、その「二つの異なる声」の響き合いがあまり意識されないということである。以下にその例を示す。左が写本版、右が印刷版である。

'Tis madnesse to resist or blame	'Tis Madness to resist or blame
The force of angry heavens flame;	The force of angry Heavens flame:
And if we would speake true	And, if we would speak true,
Much to the man is due:	Much to the Man is due.
Who from his private gardens, where	Who, from his private Gardens, where
He liv'd reserved and austere,	He liv'd reserved and austere,
As if his highest plott	As if his hightest plot
To plant the Bergamott;	To plant the Bergamot,
Could by industrious valour clime	Could by industrious Valour climbe
To ruine the great work of time	To ruine the great Work of Time,
And cast the kingdoms old	And cast the Kingdome old
Into another mold.	Into another Mold. (25-36)

見て分かるとおり、写本版は各連の区切りがより明確なため、この「二つの異なる声」の響き合いが強く意識されるといえる。また、その意味内容についていえば、作品のすべてがそうではないものの、少なくともここでは、各連後半の3詩脚の対句は、前半4詩脚の対句の内容の補足的な役割を果たしていることが分かる。全体的な効果として、写本版は、語り手の背後にもう一人の語り手が控えていて、相槌を打ちながら補助的な言説を付け足しているかのような印象を与えるのに対し、印刷版はむしろ単一の語り手が滔々と語っているように読めてしまう。この一節はクロムウェルを神格化すると同時に、彼がその実行力と勇気で成り上がり、「古い王国を新たな鋳型に入れて造りかえた」と述べているが、それを賛美と取るか大掛かりな皮肉と取るかは読者しだいである。ただ、畳み掛けるような二つの声を意識するとき、それが、一人の語り手の声というより、むしろ民衆が口々にあげるクロムウェル賛美の声を写し取ったかのような含みが生じる可能性は否めないであろう。

次に、語彙とその綴りについてであるが、綴りは全体に写本版のほうが古い綴りを多く使っているのに対し、印刷版のほうはほぼ現代の綴りに近い。これはある意味当然であろう。ただ、メアリ・マーヴェルの証言をそのまま信じるならば、この事は、詩人がその死の間際まで自作に校訂の手を入れ続けていたことを示唆する。また、綴りの誤りと思われるものが写本版にも印刷版にもそれぞれ若干見られるが、これらはおそらく単純な不注意によるものとしてほぼ無視しうる。ただ、一箇所だけ、以下の部分は写本版と印刷版とで異なる解釈の可能性を残している。

Hee to the commons feet presents	He to the Common Feet presents
A Kingdome, for his first year's rents.	A Kingdome, for his first years rents: (85-6)

commons feet と common feet は、語義的に明らかに違うものである。写本版のほうは、少なくとも表面上、国王から奪い取った権力をクロムウェルが議会（the House of Commons）に差し出した、と読むことができる。クロムウェルをはじめとする軍部の者たちにとって、この言説は自分たちの政治活動の建前を補強するもので、彼らはこれを好意的に受け取ったであろう。ただ、1650年時点の残部議会（Rump Parliament）と軍部の実際の力関係を知る者たち、特に議会から追い払われた長老派の議員たちの耳に、それがおよそ空疎に響いたことは明らかである。軍部は、その建前とは裏腹に、「もし危機が生じれば、

内乱の成果、すなわち信仰の自由と国王無き政府を確保するために介入するはずだった」のであり（Miller 241）、じっさい、クロムウェルは1653年にこの残部議会をも排除した。マーヴェルがこの一文を書きながら、無表情に頷く読者と苦笑を浮かべる読者の双方を想い描いていたという想像は、それほど荒唐無稽ではないように思われる。一方、印刷版の Common Feet の意味は難解であり、強いて言い換えれば「民衆の足元に」あるいは「社会の足元に」という意味になるだろう。この s の欠落が意図的なものであった場合、そのひとつの可能な解釈は、たとえば、この校訂がなされた時期には、もはや上記したような軍部の建前もそれに対する皮肉も、読者の心に響くことのない過去の出来事になっており、それならばむしろ、王政復古後に形を成し始めた立憲君主制の発端に、自らが仕えたクロムウェルがいたということを印象付けたかったというものであろう。このような解釈は、印刷版の想定される読者が不特定多数の市民であったという事とも整合する。

3．句読法

写本版と印刷版は、コンマ、ピリオド、コロン、セミコロンそして括弧の使用においてもかなりの相違がある。全体的な傾向としては、写本版が文と文の連続性や従属性を暗示しがちであるのに対し、印刷版はこれらの記号をより多く使ってそれを断ち切る傾向があるといえる。また、印刷版は、写本版には無い場所にコンマを使い、統語関係や挿入関係を明示する傾向があるのも特徴的である。ここではまず、コンマ一つで微妙にニュアンスが異なる以下の一節を見てみよう。

So restlesse Cromwell could not cease	So restless Cromwel could not cease
In the inglorious arts of peace	In the inglorious Arts of Peace,
But through adventrous warre	But through adventrous War
Urged his active starre:	Urged his active Star. (9-12)

この４詩脚の対句と３詩脚の対句は、それぞれ、「不名誉な和平の手管」に満足しないクロムウェルと、「危険に満ちた戦」へと自らの運命を駆り立てる彼を描いている。印刷版の２行目の行末のコンマは、その有無によりこの一節の意味をそう大きく変えるものではない。ただ、それは、PeaceとWarの大文字化とも相俟って、「和平」と「戦」をあたかも対立概念のように提示する効果をもっている。一方、写本版を読む限り、「和平」と「戦」が二者択一のものであるという印象は比較的薄い。そして、歴史記述に従うならば、そのような二者択一が所詮は文学的フィクションであることは明らかであった。クロムウェルはチャールズ処刑後の脅威となっていたアイルランドとイングランド王党派の連合軍を降伏させる意図をもって12,000という圧倒的な兵力を伴い北に向かった。しかし、ドロエダの包囲で頑なに降伏を拒まれたため、城壁を破り、その興奮が冷めやらぬまま、降伏を拒んだ都市に対する当時の軍事慣例を拡大解釈し、兵士だけでなく、武器を手にするすべての者の殺戮を命じた。結果、聖職者・市民を含む約3,500人を「虐殺」することになったのである（Miller 231, 245, Cannon 308）。のちに彼はいくつかの理由でこの虐殺を正当化したが、その理由の一つは「他の都市に抵抗を諦めさせるため」であった（Miller 245）。「和平」と「戦」はこのようにむしろ分かち難かったのであり、その点では、写本版は印刷版に比べ、当時の実情に配慮したより控えめな表現であるように見える。また、クロムウェルは、ある意味運命に翻弄されてこの「虐殺」を犯したといえるが、その失態を覆い隠そうとするならば、彼が「自らの活動の星を駆り立てた」

（urged his active star）という逆説的な強弁は、下手な弁明よりもむしろ効果的であった。王党派がこれを読んで皮肉な笑いを禁じえなかったとしても、である。そしてこのような「強弁」は、5年後の“The First Anniversary”におけるマーヴェルを特徴付け、そこでクロムウェルは、運命に翻弄される人間というより、むしろ軍神的な超人へと変貌する。印刷版が「不名誉な和平の手管」と「危険に満ちた戦」をコンマで切り離すことになったのは、マーヴェルがそのように、詩人からいわば扇動家へと変化していったこととも関連するように思われる。

句読法の興味深い相違を示すものとしては、さらに以下の一節がある。これは上記した句読法の二つの特徴を示すとともに、それが統語構造とも関わる例である。

And Hampton shows what part	And Hampton shows what part
He had of wiser art:	He had of wiser Art.
Where twining subtile fears with hope	Where, twining subtile fears with hope,
He wove a net of such a scope	He wove a Net of such a scope,
That Charles himself might chase	That Charles himself might chase
To Cares-brook's narrow case:	To Caresbrooks narrow case. (47-52)

2行目にあるコロンとピリオドの違いは、それほど大きなニュアンスの違いを生じない。一方、3行目のtwining subtle fears with hope が、印刷版ではコンマで括られているのに対し、写本版ではこれが区切られておらず、これに類似する統語構造の曖昧さは他にも多く見られる。写本版が全体に統語構造を明示するための記号を省きがちであるのは、ひとつには、格変化に頼るラテン語に慣れた者の癖という見方もできるだろうが、それは、想定される読者の問題と関わる興味深い特徴である。ただ、前に述べたように、統語構造の曖昧性は、じつは曖昧性そのものを意図しているという側面もある。その例が4行目のscopeの後のコンマの有無である。

この scope に続くThat 以下は、関係節とも副詞節とも取れる。つまり、「仄かな恐れと希望を撚り合わせ」、「チャールズその人をも追い詰めることのできるあの大掛かりな網を編んだ」という解釈と、「チャールズが自らその身を追い詰めうるように、あの大掛かりな網を編んだ」という解釈である。ただ、印刷版のように scope の後にコンマを入れると、a Net of such a scopeに対するThat以下の修飾関係が一旦途切れるため、That以下は目的を示す副詞節として後者の意味に解されやすくなる。たしかに、これにより文意はより明確になり、scope のもう一つの含意（「見通し」）も活きてくる。おそらく印刷版に加えられた校訂は、このような分かりやすさを意図したものと思われる。ただ、それではなぜ写本版にはこのコンマが無いのだろうか。それにはまた、1650年時点のある事情が関わってくる。

チャールズは、1647年にハンプトンコートから、彼としては二度目の「脱出」を果たしたが、結果的には捕えられてワイト島のカリスブルック城に再度幽閉された。そして王党派は、それがクロムウェルの仕組んだ罠だったとして彼を非難していた（Loxley 147, Worden 87）。ウォーデンによれば、「クロムウェルは、差し迫った暗殺と友好関係の公表の両者を織り交ぜて仄めかし、議会にいる軍の敵対者たちの下での幽閉状態から脱するよう国王を誘ったが、それは軍そのものが王の命運を支配することができるようにするためだった」というのが、王党派の多くが口にしていた非難であった（87）。チャールズがクロムウェルの仕掛けた巧妙な罠にはまり自らの首を絞めた、と明言することは、王党派に同調してクロムウェルを告発すると同時に、王党派に対しても、それがチャールズの失策であった事実を突きつけることになる。

王党派側にとっては、ユダの裏切りに対するイエスのように、謀略と分かっていて敢えてそれに身を委ねたという穿った解釈も可能だったはずだが、マーヴェルはチャールズを崇高化こそすれ、神格化はしていない。*Eikon Basilike*（1649）の出版によりチャールズを救世主のように崇め始めかねない民衆の心理を、John Miltonが必死で押さえ込もうとしていたことを思えば、それは当然である。いずれにしても、軍部と王党派の両者を苛立たせないよう配慮するのであれば、この曖昧な文意は曖昧なままにしておくのがおそらく得策だったのである。

さて、さらに次の一節は、写本版のなかで句読法と詩形が結びついて効果をあげている点で注目される。

And now the Irish are asham'd
To see themselves in one year tam'd.
So much one man can doe,
That dos both act and know.
They can affirme his praises best,
And have though overcome confest,
How good he is, how just,
And fit for highest trust:

And now the Irish are asham'd
To see themselves in one Year tam'd:
So much one Man can do,
That does both act and know.
They can affirm his Praises best,
And have, though overcome, confest
How good he is, how just,
And fit for highest Trust: (73-80)

この一節の大意を印刷版に従って述べると、以下のようになるだろう。「そしていま、アイルランドの者たちは、たった一年で飼い馴らされた自分らを見て恥じ入る。行動力と知識を兼ね備えた一人の男がいかに多くのことを成し遂げうるか、と。彼らこそがクロムウェルへの賞賛を最もよく断言しうるのであり、征服されてもなお、彼らは彼がいかに有能で公正で最大の信頼に値するかを告白している。」 意外に思えるかもしれないが、じつは、クロムウェル遠征後のアイルランドで、彼を賞賛する言説が聞かれたのは確かなのである。David Norbrook は、アイルランドのカトリック信徒からなる連隊のある広報官が、匿名で、ドロエダの惨事の責任は、クロムウェルの軍を側面から包囲して援護攻撃するのを怠った王党派軍のリーダー Earl of Ormond にあったとし、彼とクロムウェルを比較して後者の指揮官としての威厳や畏怖すべき面構えを称え、その迅速な勝利をシーザーのそれに譬えたと指摘している（246-7）。このような論調があったことをクロムウェルの賞賛に利用すること自体に問題はない。しかし、それは一方で、間接的な王党派非難ともなりうる。ただ、写本版をよく見ると、詩人はここで極めて微妙なかたちの「逃げ」を打っていることが分かる。2行目末尾が印刷版ではコロンであるのに対し、写本版はここでは例外的にピリオドを使っている。つまり、それに続く「行動力と知識を兼ね備えた一人の男がいかに多くのことを成し遂げうるか」という言説自体は、少なくとも統語論上は、アイルランドともクロムウェルとも無関係な一般論なのである。さらに、6行目は、印刷版が though overcome をコンマで括る代わりに行末のconfestの後のコンマを削除しているのに対し、写本版ではここにコンマがあり、その「告白」される賛辞が、直接話法で語られた感嘆文であるかのように提示されている。そして、ここで考慮すべきなのは、前章の最初で述べた「二つの異なる声」の問題であろう。もう一度写本版をよく読むならば、クロムウェルへの賛辞そのものを構成しているのは各連後半の3詩脚の対句のみで、読み手の感覚としては、それを語っているのは語り手の背後に控えているあの「もう一人の語り手」なのである。写本版のこの一節では、句読法と詩形が連動して機能しており、それは、想定される王党派読者の語り手に対する反感を、巧妙に逸らしているように見える。

４．大文字の使用

これまで検討してきた詩行のなかにも見られたことであるが、印刷版のなかでは語頭の大文字の使用（capitalization）が頻繁に行われている。ただ、17世紀の出版物では、大文字の使用は、現代英語のように固有名詞や作品タイトル等に限られず、さまざまな意図をもって恣意的かつ頻繁になされているので、そのこと自体はあまり問題にならない。写本版には無い大文字の使用を印刷版のなかで数えてみると、その数は70を超えるが、そのなかで注意を惹くものはごく一部である。具体的には語の強調、語と語のあいだの対照性や並列性の強調、語が特殊な意味であることの提示などがそれにあたる。ちなみに、写本版でのみ大文字になっている場合が若干あり、これは特に注目に値する。また、写本版でも印刷版でも共に大文字が使用されているのは、固有名詞に加え、語そのものが特殊である場合（bergamot 32, climacteric 104)、および語に特殊な意味が担わされている場合である。たとえば、以下の一節のpalacesとtemplesがそれぞれチャールズの宮廷と英国教会を指していることは、大文字化により暗示されている。

Then burning through the aire he went,	Then burning through the Air he went,
And Palaces and Temples rent;	And Pallaces and Temples rent: (21-22)

問題になるのは、やはり大文字の使用による強調や対比である。まず詩の冒頭の一節を見ると以下のようになっている。

The forward youth that would appeare	THE forward Youth that would appear
Must now forsake his Muses deare,	Must now forsake his Muses dear,
Nor in the shadows sing	Nor in the Shadows sing
His numbers languishing:	His Numbers languishing.
'Tis time to leave the bookes in dust,	'Tis time to leave the Books in dust,
And oyle th'unused Armours rust;	And oyl th'unused Armours rust:
Removing from the wall	Removing from the Wall
The Corslett of the Hall.	The Corslet of the Hall. (1-8)

印刷版のほうは、頻繁に大文字が使われているので、何かを強調しているにしてもその意図はほぼ不明である。ただ、大文字になっているのはこの一節も含めてほぼ名詞のみであり、言説の大意をグラフィックに要約するという意味で分かりやすいという利点は認められる。一方、写本版では無意味な強調は行われていない。強調されているとすれば、それは「戦」であろう（Armours, Corslett)。また、対比という観点からいえば、印刷版は、「戦」に関連するこの２語とともにNumbersとBooksを大文字化しているため、「詩を捨てて戦に赴け」というこの一節の対比的な趣意を強調しているとみることができる。これは、前に見たPeace／Warと同様である。そして、広間に甲冑を飾っている相当の身分と思しきこの若者が詠う「詩」は、numbers languishing から想像すると、叶わぬ恋、倦み疲れる恋としての「宮廷風」の恋歌であろう。また、それは、当時の王党派詩人の典型的なイメージを喚起させる。ここで問題は、写本版が「戦への鼓舞」を強調する一方で「詩の放棄」を強調していないという非対称性である。すでに述べたとおり、1650年のマーヴェルはいまだ王党派の詩人サークルと関係していた。おそらく、「詩の放棄」が「戦への

鼓舞」の陰に霞んでいるのは意図的なものであろう。いわば、彼の詩人仲間たちに対するささやかな配慮である。また、そもそも、この「詩の放棄」は、それ自体が多分に胡散臭い言説でもある。つまり、言うまでもないが、語り手はその言説自体を「詩」で語るというパラドクスを冒しているのである。スミスの言う言説の「二重性と妥協性」はすでにこの詩の冒頭から始まっており、語り手自らは「詩」を放棄する気など毛頭無く、それを行為で示しているともいえる。また、マーヴェルについて言えば、彼はOdeとほぼ同時期に書かれたと推定される“Tom May's Death”のなかで、すでに議会派に擦り寄ってパンフレットや歴史の執筆に手を染めていたメイに対する苦言を、黄泉の国で待っていたベン・ジョンソンその人に語らせているのである。王党派詩人たちに配慮したと思われる上記の非対称性は、偶発的なものではなく、おそらく意図されたものと考えられる。

これに類似する写本版と印刷版の相違は他所にも見られる。たとえば以下の一節は、この詩の主要なモチーフに関わるため特に重要である。

Though justice against fate complaine,	Though Justice against Fate complain,
And plead the antient rights in vaine;	And plead the antient Rights in vain:
But those do hold or breake,	But those do hold or break
As men are strong or weake.	As Men are strong or weak. (37-40)

２行目の ancient rights は、イングランドにおけるかつての国王の大権と、ローマの共和制における市民の権利のどちらをも表しうるため、これ自体に何か政治的な旗色を読み込むことは不可能である。じっさいこれは「内乱中のほぼすべての政治的党派により用いられた概念」であった（*Poems* 275）。ただ、それがいかなる権利であれ、「人々が強いか弱いかに応じ、それは保持されもするし打ち砕かれもする」という後半の言説は、明らかにマキャベリ的な力の論理を表している。じっさい、この作品に対するマキャベリの影響は明らかであり、その理論によるクロムウェル台頭の正当化が、亡きチャールズの崇高化と並ぶこの詩の主要なモチーフである。そしてこの意味では、１行目の fate は「力」（de facto power）と言い換えることもでき、印刷版はこれとjusticeを大文字化することで、この二つの語が象徴する政治思想の転換を対比的に明示している。一方で、写本版は少なくともその対比を強調しようとはしていない。また、上記の力の論理に関わる言説そのものは、例によって、写本版でより明確に区別されているあの「もう一人の語り手」に担わされており、第一の語り手は、むしろそのような政治思想の転換に大きな異議が存在することを complaine により匂わせているのである。

さて、写本版でのみ大文字による強調がなされているケースがごく僅かにあるが、次のものは特に興味深いので、最後にそれを見ておこう。

This was that memorable houre,	This was that memorable Hour
Which first assur'd the forced pow'r.	Which first assur'd the forced Pow'r.
So when they did designe	So when they did design
The Capitoll's first line,	The Capitols first Line,
A Bleeding head where they begun	A bleeding Head where they begun,
Did fright the Architects to run:	Did fright the Architects to run;
And yet in that the state	And yet in that the State

Foresaw its happy fate.　　Foresaw it's happy Fate.　　(65-72)

印刷版最終行のit's は、おそらく its の誤植であろう。冒頭の「あの記憶すべき時」とは、直前に語られているチャールズの処刑を指す。それは「力」により得られた権力が初めて確立された瞬間であるが、語り手はそれを、カピトリヌスの丘にユピテル神殿のための基礎を掘っていたさい、掘り出されて人々を驚かせ、のちにその場所が世界の首府となることの吉兆と解された生首と結び付けている。ただ、ここではそれは、生きているかのように損傷の無い生首ではなく、「血を流している」のである。そして、写本版が bleeding を、印刷版が head をそれぞれ大文字にしているのは見てのとおりである。繰り返しになるが、写本版と印刷版が述べていることの趣意は同じであり、そこには共に、チャールズの処刑を非難し、同時にクロムウェルを賞賛するという根本的なアンビバレンスが存在している。ただ、そこに違いがあるとすれば、写本版が特定の読者を想定して書かれたと思われる1650年のOdeにより近く、印刷版には不特定多数の読者を想定して手が入れられているということである。写本版におけるbleedingの大文字化は、一見すると、語り手が王党派の読者に対してより同情的であることを示唆するように思われる。しかし、それもまた断定はできないであろう。作品はそのタイトルも含め、あくまでクロムウェル賞賛の意図を示しているのである。強いて言えば、この写本版のテクストのなかに見られるものは、これまでに検討してきた他の例と同様、その明らかなクロムウェル賞賛の意図と、仲間の王党派詩人、あるいは国王の処刑にだけは反対した（そして現政権にも影響力をもつ）穏健派の何者かへの配慮とを、細心の注意を払ってバランスさせようとした努力の痕跡なのであり、また、その目的のために、詩形、句読法、大文字化といった言語の最も表層的でグラフィックな部分に加えられたさまざまな工夫の名残なのだと理解できないだろうか。

5．結び

本論は、ボドリアン図書館に残るOdeの写本と1681年の*Miscellaneous Poems*におけるOdeを比較検討することにより、ルネサンスから続く回覧文化の伝統と、17世紀に飛躍的に興隆した出版文化が、この作品のなかでどのように交錯しているかを見てきた。詩における回覧文化の伝統は根強く、それが少なくとも17世紀半ばにまで及んでいることはすでに述べた。そして、その回覧文化が出版文化と交錯する地点には、じつは検閲というもうひとつ無視できない要因が絡んでいる。エリザベス朝からスチュアート朝にかけて、検閲は国王の星室院により行われたが、内乱とともに星室院は1641年に廃止され、以降、検閲の主体は1643年の議会布告をもって議会へと移った。ただ、当初は検閲の実務を書籍出版業組合が代行していたために規制には実効が伴わず、1647年の議会布告の再制定、そして1649年の出版法の制定を経て、ようやく議会派側の検閲体制は確立した（Potter 1-19）。いわゆるパンフレット戦争は、この一時期手薄になった検閲体制の間隙を縫って勃発したが、詩に関して言えば、王党派は、ほとんどが匿名でではあるが、唄、俗謡、連祷、そして哀歌といったジャンルの詩を通じて持ち前の機知を発揮し、議会派攻撃を行った。マーヴェルがラヴレイスら王党派の要人達に捧げる３編の詩を出版したのは1648年から1649年にかけてであるが、ラヴレイスとヘイスティングズに捧げた詩は実名で、ヴィリヤーズへの詩は匿名で出版された。前者２編を実名で出版したのは、それぞれ、推奨詩という検閲官の盲点を突く、また、追悼詩という社会儀礼上許容される度合いの高いジャンルでの出版だったからである。1650年の時点では、たとえそれがクロムウェルを賞賛する詩であろうとも、時事的な話題に関わる、それも亡きチャールズを崇高化す

る意図が半ば読み取れるような詩を出版することは困難だったと言わざるをえない。以降、王党派詩人たちの多くは詩の出版から遠ざかり、たとえばKatherine Philipsのように、自身の文学サークルの同人に詩を回覧することで、王党派としての政治的・文化的結束を維持していくことになる。そして、その詩のなかでは、想定される読者の特定性（彼女の場合はそのサークルの政治的、文化的、あるいはジェンダー上の結束がそのような特定性を保証している）のみが可能にする、暗示的で機知に富み、さまざまな感情の陰影に彩られた豊かな言語世界が構築されている。ある意味でそれは、検閲の強化により余儀なくされた回覧文化の継続があってこそ成立した言語世界なのかもしれないのである。

一方、マーヴェルは、Ode等の執筆後、ヨークシャーにある議会派軍元総司令官トマス・フェアファクス卿の館で、その娘メアリの家庭教師となり、そこで後世に残るカントリー・ハウス・ポエム“Upon Appleton House”や代表作“The Garden”等を書いたのち、クロムウェルの被後見人William Duttonの家庭教師となった。それから、1655年の“The First Anniversary”の出版を経て、1657年にミルトンの助手として国家評議会のラテン語秘書官に任命された。“The First Anniversary”は、クロムウェルにカリスマを与え崇高化するためのさまざまな創意を凝らし、大胆な言説を提示しつつも、詩人自らの政治的・宗教的立場を実は明示しない慎重さをも備えた優れた政治詩ではある。ただ、それは、その創意や政治性においていかに卓越しているとはいえ、基本線においては、内乱期のブロードサイド詩人たちが行っていた大衆プロパガンダと大きく異なるものではない。そこには、たとえば“Upon Appleton House”から滲み出てくるフェアファクス卿の人格や彼に対する敬意、メアリへの愛情、そして何より、自らの紡ぐ言葉とそれを聴く者との想像上の対話の中で、相手の心の琴線のありかを手探りしながら進んでいくような繊細さは感じられない。そして、その理由の少なくとも一つは、この詩がその読者を、それが捧げられたクロムウェル自身とともに、顔の見えない無数の人々として想定しているからなのである。

一方、これまで見てきたとおり、Odeは、たしかに政治詩ではありながら、その当初の草稿においては、“The First Anniversary”とは一線を画すこの繊細さを示していたのではないかと思われる。マーヴェルは、のちに“Upon Appleton House”を書いたのと同じように、想定される読者の心の琴線（あるいは地雷）のありかを慎重に手探りしながらそれを書き進めたのである。スミスは、Odeが、マーチャモント・ネダムの発行する議会派のニューズブック*Mercurius Politicus*への掲載の可能性を視野に入れて書かれたのかもしれない、と述べているが（82）、この所見には私はあまり賛成できない。もし出版の可能性を視野に入れていたのならば、そもそもこのような作品を書きえたであろうかという疑問が残るからである。少なくとも、それを視野に入れていたとするならば、この作品は英国図書館に残るあの印刷版により近いかたちで書かれていたと推測されるのである。そして、その印刷版の特徴である語り手の声の単一性、明瞭な統語構造、概念の二者択一的な対照、大文字化によるグラフィックな要約性等が、急速に興隆しつつあった出版文化、あるいは王政復古後の詩が向かった「風刺」への方向性といったものとどのように関連しているかということは、今後考察すべき大きな研究課題である。

注

1．本論は平成27年度～令和1年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般））、課題番号15K02294「17世紀イギリス詩における回覧文化と出版文化」による研究成果の一部である。「回覧文化」という言葉を、筆者は、手稿の回覧により形成される文学文化という意味で使っている。英語であればmanuscript cultureが一般的であるが、直訳の「手稿文化」ではその意が通じにくいため、この用語を用いた。

2．写本の判読とタイプはすべて筆者による。写本の状態は極めて良好であり、筆記者にはコンマおよびセミコロンの下の点を半円状に撥ねる癖があるため、ピリオドおよびコロンと確実に区別がつく。大文字と小文字は、Kとｋにやや紛らわしさがあるが、他の文字については明瞭に区別されている。

3．ファクシミリ版とともに、データベースEarly English Books Onlineが提供している電子テクストがあり、両者を参考にした。

引用文献

Cannon, John, editor. *The Oxford Companion to British History*. Oxford UP, 1997.

Carter, Ronald and John McRae. *The Penguin Guide to Literature in English: Britain and Ireland*. 2nd edition. Pearson Education, 2001.

Loxley, James. *Royalism and Poetry in the English Civil Wars: The Drawn Sword*. Macmillan, 1997.

Marvell, Andrew. "An Horatian Ode upon Cromwells return from Ireland." Bodleian Libraries MS Eng. Poet d. 49.

----------. *Miscellaneous Poems*. British Library C.59.1.8, 1681.

----------. *The Poems of Andrew Marvell*. Edited by Nigel Smith. Pearson Education, 2007.

Miller, John. *Early Modern Britain 1450–1750*. Cambridge History of Britain. Cambridge UP, 2017.

Norbrook, David. *Writing the English Republic: Poetry, Rhetoric and Politics, 1627–1660*. Cambridge UP, 2000.

Potter, Lois. *Secret Rites and Secret Writing: Royalist Literature 1641–1660*. Cambridge UP, 1989.

Smith, Nigel. *Andrew Marvell: The Chameleon*. Yale UP, 2010.

Wilcher, Robert. *The Writing of Royalism 1628–1660*. Cambridge UP, 2001.

Worden, Blair. *Literature and Politics in Cromwellian England: John Milton, Andrew Marvell, Marchamont Nedham*. Oxford UP, 2009.

Woudhuysen, H. R. *Sir Philip Sidney and the Circulation of Manuscripts 1558–1640*. 1996. Oxford UP, 2003.